

平成 30 年度第 28 回「中村元東方学術賞」授賞式

平成 30 年度 10 月 10 日 インド大使館講堂

第 28 回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員会における選考経過をご報告し、併せて授賞理由を申し述べさせて頂きたいと思っております。

さて、この度の選考に際しましては、〈「中村元東方学術賞」審査委員会〉の先生方の他に、過去 27 回にわたりまして東方学術賞を受賞された方々にも、さらには広くインターネットを通じて公募し、「中村元東方学術賞」に相応しい功績のある研究者の推薦方をお願い致しました。諸先生から推薦された研究者は、それぞれにすぐれた業績を挙げられており、選定は困難を極めました。慎重審議の結果、皆様にご案内状でご報告申し上げましたように、第 28 回の中村元東方学術賞を

高橋孝信東京大学名誉教授

に授与することに決定致しました。授賞理由は以下の通りであります。

授賞理由

高橋孝信博士は 1951(昭和 26)年のお生まれで、1977(昭和 52)年東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程に進学、当初は仏教を研究するつもりでおられました。しかし中村元先生の『インド思想史』（岩波全書）に紹介されていた、タミル文学の代表作である 5 世紀ごろの箴言集『ティルックラル』の 4 つの 2 行詩の虜になり、タミル文学の研究を志されました。たまたま南インド研究の開拓者辛島昇先生がタミル初等文法の授業があると言うので参加されました。しかし、当時はインターネットなどなく、辞書もタミル文献も手に入りませんでした。

そのような中で、昭和 54 年 4 月に東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程に入学、幸運にも同年 10 月、当時の文部省のアジア諸国等派遣留学生に選ばれ、タミル文化の中心地のマドゥライ大学に留学されました。2 年 4

ヶ月のマドゥライ大学留学中は、現代タミルから始まり、留学の後半は古典文学や古典文法を学ばれました。また、現地で古典から現代に至るまでの数多くのタミル語文献を入手されました。

帰国して東京大学大学院に復学され、インドで学んだタミル古典の約束ごとについての修士論文『タミル古典の伝統—クルンドハイを中心に』を提出されました。その後博士課程に進学され、博士 2 年次からオランダ・ユトレヒト大学に 3 年 6 ヶ月留学されます。ユトレヒトではタミルおよびドラヴィダ学の泰斗カミル・ズヴェレビル教授のもとで、高度に様式化されたタミル古典恋愛文学の約束事の形成と発展について研究し、『詩と詩論：タミル恋愛詩の文学伝統』と題する英文の博士論文を提出し、1989 年にクム・ラウデという高い評価とともに博士（文学）を取得されました。

この博士論文は、やがて 1995 年にオランダの名門出版社ブリル社から『タミル恋愛詩と詩論』（原文は英語）という題で出版され、世界の著名な大学や図書館に所蔵され、またそれ以後のタミル研究では必ず参照文献に挙げられているように、タミル古典研究では必携の書となっております。

高橋博士の研究の第一の側面は、上の書に述べられているように、詩論があってその規定に従って文学が作られたという伝統的な解釈とは反対に、作品があって詩論はそれを基に作られたことや、恋愛文学のテーマは時代とともに変化発展したことを明らかにしたことにあります。

第二の側面は、上の研究のうちの詩論研究に基づくものです。欧米の研究者は、コンパクトな詩論から発展し大きな詩論が書かれたと考えておりましたが、高橋博士は恋愛文学の術語の研究をもとに、大きな詩論では術語が固定しておらず、逆にコンパクトな詩論では術語が確定していることを発見しました。そこで 2004 年の論文で、大きな詳細な詩論をもとにコンパクトな詩論が詩人の参考書として作られたことを証明し、80 年におよぶこれらの比較年代論争に終止符を打ちました。

また、2015 年の論文では、タミル古代に関する伝説、いわゆるサンガム伝説のなかに述べられた書名のうち、内容不明とされてきた 4 つの作品を、研

究史上初めて同定しました。この論文は、2年後の研究書では早くも「説得力のある論説」として引用されております。

高橋博士の業績の第三は、論文はもちろん、翻訳や事典などの記述により、タミル文化をわが国へ紹介されたことです。翻訳ではすでに述べました『テイルックラル』の全訳を含めて三書ありますし、事典でも集英社の『世界文学大事典』でタミル文学をはじめとしたドラヴィダ文学に関する70項目やその他の事典などで数多く執筆しておられます。

以上高橋孝信博士のご業績を概観いたしました。高橋博士は、わが国では未開拓であったタミル文学などのドラヴィダ文学研究の嚆矢であり、しかも国際的に著名な研究者であります。しかしながら、高橋博士の40年にわたる研究生活も、もとはといえば、中村元先生がインド思想文化の普及のために記された、たった1頁の記述から始まりました。審査委員会では、常に一番槍を目指された中村元先生もさぞお喜びのことと思ひ、高橋博士が、今後とも国を超えて東洋諸文化の理解と普及のために活躍されることを期待しつつ、今回の授賞者とした次第であります。